

ちの引き起こす哀惜の情に彩られてしまいがちである。そこに、「アート」の持つ祝祭性や脳天気さをぶつけたところが本書の工夫であり、特徴であると言えるだろう。そのことによって、いわば弔いがお祭りへと転化しているのである。またアートの側にも、人類学を通して人々の営みからの想像力を取り込みたいという欲求があるのだと思われる〔美術手帖編集部2018〕。³⁾ 近年、瀬戸内海はアートで賑わっている。塩江と同様、私のいる大三島でも、建築家の伊東豊雄氏をはじめとする多くのアーティストたちが、町並み再生をはじめとしたさまざまな活動を繰り返している。そのようにあちこちの地域で、人類学から見える歴史や「もの」と、アートとの共創が火花を散らしているのである。

少し注文も書いたが、それを差し引いても本書がたいへんな力作であるということに変わりはない。冒頭に書いたような、日本の至るところで見られている喪失の悲しみを転化し、乗り越える試みが示されているからである。地域の歴史、「もの」のもつ力、そしてアートに関心のある方に、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

引用文献

- 赤瀬川原平. 1987. 『超芸術トマソン』 筑摩書房.
美術手帖編集部. 2018. 『美術手帖 2018年6月号
特集 アートと人類学』 美術出版社.
太田好信. 1998. 『トランスポジションの思想—

3) 「トマソン」と名づけられた不要なものたちの持つ、わけのわからないパワーを「超芸術」と呼んだ赤瀬川原平の視点も、これに近い発想だろう〔赤瀬川1987〕.

- 文化人類学の再想像』 世界思想社.
柳田國男. 1970. 「火の昔」『定本 柳田國男集 第21巻』 筑摩書房, 149-276.

千田沙也加. 『カンボジア「クルー・チャッタン」の時代—ポル・ポト時代後の初等教育』 東信堂, 2023年, vi+260 p.

吉田篤史*

本書は、カンブチア人民共和国（1979年～1989年、以下、人民共和国と表記）における初等教育を、教員資格をもたず教師に任命された「クルー・チャッタン」のライフヒストリーを通して考察したものである。1975年から約3年間続いたポル・ポト政権では、教員の虐殺や学校教育の停止により、近代教育制度は崩壊に追い込まれた。その後、政権を握ったカンブチア人民革命党は、人民共和国を樹立して教育再建に取り組むことになる。しかし、前政権下での教育制度の崩壊により、その道のりは困難を極めた。本書は、その過程を経て再建された初等教育を教師たちの語りから考察し、末端社会での教育実践の一端を明らかにしている。

本書の概要

本書は序章、第1章から第3章でなる第1部、第4章から第6章でなる第2部、そして終章で構成される。第1部は史資料から政権が掲げた教育構想を分析し、第2部では「クルー・チャッタン」のライフヒスト

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

リーを考察している。教育構想というマクロな分析の後、ライフヒストリーによるミクロな分析を行なうのが本書の特徴である。

序章は、本書が行なう分析の概要説明である。本書の目的は「人民共和国期における教育再建に注目し、(中略)この時期の初等教育の意味と価値を、ローカルで個別的な観点から明らかにすることである」(p. 3)。このために本書が着目するのが、本書のタイトルにもある「クルー・チャットン」である。彼らは、「ボル・ポト政権崩壊後に教師の資格の有無を問わずに小学校教師に採用された」(p. 16)教師を指す。本来、クルー・チャットンとは「任命された教師」を意味し、ボル・ポト政権時代後に正規の教員養成課程を経て任命された小学校教員も含む。そこで、著者は分析対象を「クルー・チャットン」として鍵括弧を付し、両者を区別している。

第1章は、カンボジアにおける教育史の要約である。同国では19世紀末まで伝統的な寺院教育が行なわれていたが、フランスに保護国化されると、官吏養成を目的にフランス語を教授言語とした近代教育制度が導入された。独立後シハヌークが政権を握ると、教授言語のクメール語化など改革も行なわれた。しかし、その後のロン・ノル政権下では内戦により教育活動は停滞し、ボル・ポト政権下では停止に追い込まれた。1979年に人民共和国が成立すると、政府はベトナムによる支援のもと学校教育を再開させる。しかし、適切な訓練を受けた教師を確保できず、当時の教員約14,000人のうち約4,000人が「クルー・チャットン」だった。

第2章は、当時発行された新聞から、政権が掲げた教育構想を分析している。同紙は国民に対する主要な宣伝手段であり、そこで政権が強調したのは旧来のものとは異なる新たな教育制度を建設する必要性であった。そして、再建過程は教員数など具体的な情報と共に報道され、国の発展や平和の象徴として描かれた。加えて、著者は女子教育と少数民族教育に関する記事に着目し、前者は社会主義教育理念の反映などを目的に重視される一方、後者は民族固有の教育を保証した憲法に反し、カンボジア国民として画一的な教育が行なわれたと結論づける。

第3章は、再建された初等教育の特徴を当時の教育カリキュラムから読み解いている。政権は、教育を通してボル・ポト政権と異なる「純粋な社会主義」(p. 105)の確立を目指していた。初等教育はその基礎として重視され、ボル・ポト政権下で教育を受けられなかった子どもなど、あらゆる年齢の生徒の受け入れが掲げられた。授業科目の中では、クメール語と社会主義教育特有の「労働」科目が特に重視され、前者はカンボジア国民としてのアイデンティティ創出と反ボル・ポト思想の形成、後者は生産活動における団結精神の涵養をそれぞれ目的としていた。

第4章では、4人の「クルー・チャットン」のライフヒストリーを通して彼らの特徴を明らかにしている。1つ目に挙げられるのが、彼らの柔軟な教育実践である。たとえば、ある「クルー・チャットン」は、人民共和国発足直後で新しい教科書がないなか、ボル・ポ

ト政権以前の教科書を用い、自らの学習経験に基づき授業を行なった。2つ目は、高学歴の「クルー・チャッタン」に対する「引き抜き」である。これは、教員不足を背景とした行政による直接的な勧誘による教員採用を指す。ボル・ポト政権以前に就学歴がある「クルー・チャッタン」は、小学校教員や中学校教員に引き抜かれ教育再建に貢献した。

第5章は、より多数のライフヒストリーに基づき、「クルー・チャッタン」たちの人物像をひもとく試みである。それによれば、彼らはボル・ポト政権以前に高等教育を修了した人から、人民共和国期に就学経験を積んだ人まで、多様な背景をもつ人々だった。そんな彼らに「クルー・チャッタン」としての集団認識をもたらすのが、「人民共和国期初期に引き抜かれて小学校教師になった」(p. 170)という共通の経験である。そして、政権のスローガンや教育の機会を奪われた子どもたちの存在を動機に、彼らは「クルー・チャッタン」となっていったと指摘する。

第6章では、第3章で主要科目であることが明らかになったクメール語と「労働」の2科目を、「クルー・チャッタン」の語りから分析している。先述したように、政権はクメール語の授業を通して反ボル・ポト思想を形成することを目指していた。しかし、実際の授業を担った彼らはその目的を重視せず、むしろ基礎的な言語能力の習得にその意義を見出していた。また、「労働」科目に対しても政権が掲げる教育的意味や価値に関心を示していなかった。政権側も、同様の教育を行っていたボル・ポト政権との共通性を想起

させてしまう恐れから、彼らに対して「労働」教育の徹底を図るのは不可能だった。

終章では、本書の内容をまとめた後、現代の教育開発などの在り方を再考するうえでの示唆が導き出される。

本書の評価

人民共和国期の教育に関する研究はあまり多くない。その中でも、本書がもたらした最大の貢献は、「クルー・チャッタン」に対するイメージを塗り替え、彼らの柔軟な教育実践や教育再建に果たした役割を描き出したことである。先行研究は、ボル・ポト政権で近代教育が停止されたことを踏まえ、同時代を生き抜き且つ教員免許をもたずに教師になった「クルー・チャッタン」を、読み書きができる程度の存在として説明してきた。また、当該時代の教育研究は教科書分析などが多く、教育再建を実際に担った彼らはあまり着目されてこなかった。

しかし、本書は彼らのライフヒストリーを丹念に収集することで、元医学生など高等教育を修了した人も「クルー・チャッタン」となり、「引き抜き」を通して初等教育のみならず中等教育などの再建にも貢献したことを明らかにしている。また、ボル・ポト政権以前に用いられていた教科書の使用や、社会主義教育の要である「労働」科目の不徹底など、政権の構想と矛盾する多様な実践も数多く指摘している。これは、彼らのライフヒストリー分析に主眼をおきながらも、政権の構想も併せて分析する本書だからこそ明らかにできた事実である。そのため、本書の議論は

当時の一国全体の教育を理解するうえで示唆に富むものである。

その一方、本書には課題も存在する。まず、本書における各章の分析の位置づけが不明瞭な点である。たとえば、第5章において著者は「クルー・チャタン」の社会的地位の低下に関する分析を行なっている。しかし、その目的や問いとの関連が十分説明されておらず、その他の分析とのつながりも示されていない。結果的に「引き抜き」と並んで彼らに共通する経験の析出に成功しているが、本書の中での位置づけが定かでないことには変わりなく、当該分析が一連の議論から独立してしまっている印象を受ける。同様の問題は本書を通じて散見されるため、各分析は興味深いものの、議論の流れや著者の主張が掴みにくくなっている。

次に、初等教育におけるベトナムの影響に関して、矛盾する評価が混在している点である。当時はポル・ポト政権崩壊後の国家再建を目的に、ベトナムから少なくとも2,000人以上の専門家が派遣され [Ayes 2003: 128], 教育を含むあらゆる行政部門は彼らの指導下におかれていた。それらの経緯を踏まえ、著者は第1部において、社会主義的な教育内容やベトナムに関する授業内容を根拠に、初等教育におけるベトナムの影響は明白であったと結論づける。その一方、終章では一部の先行研究がベトナムの影響の証左の

ひとつとしてきたベトナム語教育が初等教育に組み込まれていなかったことを挙げ、「政権側による教育再建の構想を検討した結果、(中略)ベトナムの影響を、直接確認することができなかった」(p. 220)と述べている。このように、本著ではベトナムに関する評価をめぐって相反する結論が提示されているため、この点に関する著者の主張を読み取ることが難しく、議論の一貫性という面で課題を抱えている。

以上、本書の問題点を指摘したが、人民共和国時代の初等教育を考察するうえで示唆に富むことに変わりはない。著者は彼らのライフヒストリーを通して、ポル・ポト政権崩壊後の末端社会で行なわれた多様な教育実践をさまざまな視点から描き出しており、この点が本書最大の魅力である。また、当該時代に留まることなく、紛争後のカンボジアにおける教育や国際教育開発全般に対する示唆も導き出している。そのため、カンボジアのみならず、紛争後社会や各国の教育政策を対象とする研究者にも読まれたい一冊である。

引用文献

Ayes, M. David. 2003. *Anatomy of a Crisis: Education, Development, and the State in Cambodia, 1953–1998*. Chiang Mai: Silkworm Books.